

クラス間連携によるプレゼンテーション指導の試み

—2013年度日韓共同理工系学部留学生向け
予備教育での取り組み—

高原 真理 石上 綾子 鄭 聖美

要 旨

筑波大学では、2000年度から日韓共同理工系学部留学生に対する日本語予備教育を行っており、2013年度には7名の学生の受け入れを行った。日本語予備教育の最後には、学生が専門分野について日本語で発表する修了プレゼンテーションの機会を設けており、その指導はこれまで「会話・プレゼン」クラスが主に担ってきた。2013年度は基礎的な文章力の低下や日本語レベルの差といった学生の変化に対応するため、「会話・プレゼン」クラス、「作文」クラス、「日本事情」クラスが連携して指導にあたった。本稿では、3クラスの連携による修了プレゼンテーション指導の取り組みについて、そのねらいと成果を報告し、取り組んだ教員の振り返りを踏まえて今後の課題を検討する。

【キーワード】 日韓予備教育 プレゼンテーション 作文 母語支援 連携

A Trial of Presentation Training featuring Inter-Class Cooperation: on the preliminary education for undergraduate students in the Japan-Korea Program in 2013

TAKAHARA Mari, ISHIGAMI Ayako, JUNG Sungmi

【Abstract】 Since 2000, the International Student Center at the University of Tsukuba has provided preliminary education for undergraduate students in the Japan-Korea Joint Science and Engineering Program. In this preliminary education, students have had opportunities to do presentations about their majors in Japanese at the end of the course. Until 2013, the “Conversation and Presentation” class had taken charge of the preparation for the presentation. This year however, to deal with the change of the students’ writing skills and Japanese levels, “Conversation and Presentation”, “Writing” and “Japanese Issues” classes cooperated for the preparation. This report details the aim and results of the new trial, introduces the reflections of the teachers involved, and looks to the future.

【Keywords】 Japan-Korea preliminary education, presentation, writing, support by L1, cooperating

1. はじめに

日韓共同理工系学部留学生事業（以下、日韓プログラムと呼ぶ）は、1998年の日韓首脳会談後、日韓共同宣言に基づいて2000年度からスタートし（許他 2004）、2013年度に筑波大学では14期生7名の受け入れを行った。日韓プログラムの学生たちは、韓国慶熙大学で半年間の予備教育を受けた後、日本の受け入れ大学にてさらに半年間の予備教育を受け、各学部（筑波大学では学群）に入学する。筑波大学留学生センターで行っている日韓プログラムの日本語予備教育では、2002年度の3期生から予備教育修了プレゼンテーション（以下、修了プレゼンテーション、あるいは発表会と呼ぶ）を行っており、留学生センターの日本語教員のみならず、所属予定先の学群教員、日韓プログラムの先輩に向けて、自分の興味のある専門分野について日本語で発表を行う。

これまで修了プレゼンテーションの発表準備は、予備教育クラスの1つである「会話・プレゼン」クラスが主に担う形で行われてきたが¹、2013年度は新たな取り組みとして、3クラスの連携による指導を試みた。そこで本稿では、「会話・プレゼン」クラス、「作文」クラス、「日本事情」クラスの3クラスが連携して行ったプレゼンテーション指導について、そのねらい、方法、振り返りと今後の課題を中心に報告する。

2. 筑波大学日韓理工系学部留学生向け予備教育の概要

筑波大学での日韓プログラムの予備教育は、毎年専任教員が交代でコーディネーターを担当し、各期の学生にあわせて半年間のスケジュールを組み、カリキュラムを編成して、指導を行っている。2013年度の来日から予備教育修了までのスケジュールは以下の通りである。

10月上旬	来日 学群の関係教員、チューター、TAとの顔合わせ 生活オリエンテーションなど 秋学期開始
1月下旬	秋学期修了 予備教育修了プレゼンテーション
2月上旬	日韓予備教育修了式

学生が受講した授業の概要は表1の通りで、大きく分けて2つの科目とホームルームがある。まず、日本語日本事情科目であるが、3科目中、日韓日本語と日本事情のクラスは、日韓予備教育用に開講されるものである。修了プレゼンテーションに向けてクラス間連携での指導を行ったのは、この中の「会話・プレゼン」クラス（担当：高原）、「作文」クラ

ス（担当：石上）、「日本事情」クラス（担当：鄭）である。能力別技能別日本語補講のクラスは、本学の留学生を対象としたコースで、日韓プログラムの学生たちも週6コマまで選択可能である。次に専門科目だが、これは学群入学後に受講する各学群の専門授業の準備用に行われる日韓予備教育用のクラスである。そしてホームルームであるが、その必要性の背景には、日韓プログラムの予備教育を受ける学生は、「18歳から19歳と年齢的に若い点、そして外国での生活や一人暮らしが初めてである学生も多く、日本語のみならず、生活指導や学習面の支援等が欠かせない」（許他 2004）ことがある。

表1 日韓予備教育の授業概要

日本語日本事情科目	<日韓日本語> (週4コマ)
	会話・プレゼン (担当：高原)、作文 (担当：石上)、文法、漢字
	<日本事情> (週1コマ)
	日本事情 (担当：鄭)
	<能力別技能別日本語補講> (週6コマ)
	文法、会話、聴解、読解、作文、漢字の中から週6コマまで選択可能
専門科目	<日韓理数系科目> (週2コマ)
	数学
	オムニバス (物理学類、応用理工学類、工学システム学類、生物学類関係科目)
その他	<HR> (週1コマ)
	HR

次に2013年度の受け入れ学生について報告する。受け入れ学生は7名で、女子が2名、男子が5名であった。また、受け入れ時の日本語レベルは、J500レベル（中級前期）が4名、J600レベル（中級中期）が1名、J800レベル（上級）が2名であり、レベル差が大きかったことが特徴として挙げられる。なお、所属予定学群は表2の通りであった。

表2 14期生の所属予定学群

学群名	学類名	人数
理工学群	物理学類	1名
	応用理工学類	3名
	工学システム学類	2名
生命環境学群	生物学類	1名

3. クラス間連携によるプレゼンテーション指導

3.1 予備教育修了プレゼンテーションの目的

前述の通り、修了プレゼンテーションは2002年度から開始されたもので、その目的は「予備教育を修了する時点で、各自が興味のある専門分野についてスクリプトを作成し、その内容を日本語で発表すること」(許他 2004)であり、「大学での学習や専門内容についても自信が持てるいいチャンス」(同上)として続けられてきた。上記を踏まえ、報告者らは修了プレゼンテーションの実施目的を以下のように定め、指導を行った。

- ①発表準備を通し日本語で発表原稿、スライド、レジュメを作成することで日本語能力を向上させる。
- ②アカデミックな場における発表の仕方、質疑応答の仕方を学ぶ。
- ③日韓予備教育を通して向上した能力、あるいは、まだ不十分な能力について自ら把握し、今後の学習に対するモチベーションを高める。
- ④発表準備を通して自らの専門に関する興味の対象を探り、大学入学後に何を学び、研究したいか、そして、将来どのような道に進みたいのかを考える。
- ⑤発表準備と当日発表を各々が自己満足できるレベルまでやり遂げることで、アカデミック・ジャパニーズによる達成感と成功経験を増やし、入学後の学習への自信につなげる。

3.2 クラス間連携の背景と狙い

修了プレゼンテーションは、学生一人10分の発表、5分の質疑応答時間が設けられており、発表を聞きに来る参加者は本プログラムの理工系の学生とは専門が異なることが多い。そこで、学生は短い時間で、専門外の人にも分かるように専門的な内容を発表することが求められる。そのためには、まず自分が何に興味があるのかを探り、その興味の対象の専門的内容を上述の参加者に向けて発表できる段階まで理解する必要がある。その上で、発表構成を考え、発表原稿、スライド、レジュメを作成し、アカデミックな場にふさわしい態度で発表し、質疑応答を適切に行わなければならない。以上の指導は、これまで「会話・プレゼン」クラスが中心となって担い、発表準備を行ってきた。

しかし、学生の指導を行う中で、年々文章力の低下を感じるようになり、「会話・プレゼン」クラスの授業時間や宿題添削だけでは、上述の指導を十分に行うのが難しくなってきた。インターネットや携帯電話の普及の影響か、短い文を書くことには問題のない学生でも、長い文章となると、意図が不明確な文章を書いたり、構成が不十分で、文と文をつなげただけの文章を書いてしまうことが多く、その個別指導に時間を要するようになったためである。一方「作文」クラスでも、書くことの明確な目的がないとモチベーションが上がらないためか、これまでの作文の課題にはあまり興味を持てなかったようで、積極的

に作文に取り組みない面が見られた。その上、「会話・プレゼン」の授業で発表用原稿を書き、「作文」の授業でも他の課題で作文を書くというこれまでの方法では、基礎的な文章力の向上が必要な学生にとっては負担が大きいと判断した。12期、13期でも、最終発表については原稿等がある程度完成した段階で、発表内容の見直しと向上のため、教師の連携による指導は行ってきたが、今回はそれをさらに発展させ、コースの開始段階から一貫した連携が行えるよう、「会話・プレゼン」クラスの発表テーマと「作文」クラスの作文テーマを同一のものにし、それぞれの技能により特化した指導を行うこととした。

また、もうひとつの学生の変化として、来日時の日本語力に差が出てきていることも挙げられ、今期は中級前半レベルのJ500と上級レベルのJ800の学生が混在することとなった。これまでも学生間のレベル差は多少見られたものの、クラス全体の日本語レベルが高かったため、クラスレベルは上位レベルの学生に合わせて指導してきた。そして、下位の学生のケアは学生のプライドを考えてクラス内では行わず、「会話・プレゼン」クラスの教員と、韓国語母語話者である「日本事情」クラスの担当教員が連携し、クラス外で行ってきた。下位の学生は専門内容について知識や力は十分あるのにも関わらず、それを日本語で表現しようとする、思い通りにできないため、自信を無くしやすく、時には劣等感や挫折感につながる場合もある。それは報告者らの設定した、修了プレゼンテーションの実施目的の一つ、「⑤達成感と成功経験を増やし、入学後の学習への自信につなげる」に反することである。そこで、下位の学生には韓国語母語話者の教員が発表内容を母語で考え整理させたり、言いたい内容と表現した日本語がどう違うかなどを母語で考えさせたりする支援を行うようにした。以上の指導は下位の学生数が少なかったからできたことである。しかし今期はJ500段階の学生が4名もいたため、以前のようなクラス外での支援が難しくなってきた。そこで今期は、これまでクラス外で行ってきた上記の支援を、「日本事情」クラス内に取り入れる試みを行った。

3.3 クラス間連携における各クラスの役割

以上を踏まえ、今回の連携においては以下に述べるような役割分担を行った。クラス内ではそれぞれの役割を果たしながら、クラス外では常に情報交換を行い、互いを補いあうことで連携の効果を向上するように心がけた。なお、3クラスの授業のスケジュールを文末資料の表にまとめた。3クラスの連携の流れについては文末資料の表を参照されたい。

(1) 「発表・プレゼン」クラスの役割

本連携の取りまとめ役として総轄を担当。コース前半から後半にかけて、発表に適したアカデミック日本語、発表態度、質疑応答に重点を置いた指導を行った。後半では特に、修了プレゼンテーションのための発表内容と構成に関する検討の支援と発表会の運営の指導を行った。

(2) 「作文」クラスの役割

本連携において、発表の原稿作成、レジュメ作成、招待メールの作成を担当。作文テーマを「会話・プレゼン」クラスの発表テーマと共通にした。そして、作文の授業で学生が書いたものを教師が添削し、学生はそれを書き直してレジュメを作成してから発表に臨ませた。

(3) 「日本事情」クラスの役割

本連携において、前半では7人に対する事前練習を、後半では下位の学生に対する母語支援を担当した。前半では7人に対して、日本語のウェブ検索や日本語のスライド作成、日本語での発表態度と質疑応答の事前練習を行い、後半では、下位の学生に対して発表の内容と構成、発表態度、質疑応答について母語による支援を行い、クラス全体活動として「会話・プレゼン」・「作文」クラスの授業を母語媒介で振り返る支援を行った。

4. 各クラスの取り組みと学生の様子

4.1 「会話・プレゼン」

4.1.1 「会話・プレゼン」クラスの目標

このクラス名は、「会話・プレゼン」クラスであるが、会話については、能力別技能別日本語補講クラスでも開講されていることから、本クラスはプレゼンテーションに重きを置き、発表に必要な日本語能力の向上を目的に授業を行っている。2013年度14期の担当者である高原は、2011年度の12期からこのクラスを受け持っており、以下報告する授業方法や評価方法等は、前任者である杉浦千里氏が考案したものをベースに組み立てたものである。

まず本クラスの目標であるが、以下4点を授業開始時に学生たちに提示した。

- (1) 自分が調べたこと、自分の考え・意見を、聞き手が分かるように伝えられるようになる。
- (2) 発表を聞いて、良い質問ができるようになる。
質問に対して、きちんと答えられるようになる。
- (3) 正しいスピーチスタイル、敬語で話せるようになる。
- (4) 最終発表に向けて、自分が何に興味があるのかを考える。

第一の目標は、聞き手にとって分かりやすい発表を行うことである。学生も身近なテーマであれば、聞き手が理解できる説明をある程度は行うことができる。しかし専門的なテーマとなってくると、調べたことをそのままに発表してしまうことが多く、専門用語を羅列しているだけのものとなることが多い。また、発表の構成が不十分であると、発表の主旨が理解できず、さらに理解が困難となる。加えて、発表者自身もその内容について十分に

理解せずに発表していると、聞き手に質問されても答えられないということがある。そのため、まずはどのような発表が聞き手にとって分かりやすい、良い発表なのかを考えてもらい、その目指すべき発表に向けて自分の発表方法を向上させていくことを目標として掲げた。

第二の目標は質疑応答に関するものである。これは、過去のクラスで質疑応答練習の際、発表者が質問の意図を理解せずに答えてしまい、適切な応答ができていないこと、質問者と発表者が互いに批判的な物言いになってしまうこと、また、両者が自分の意見を一方的に主張するのみで、主旨が不明確な質問や応答を行うことが多く見受けられたためである。そこで、より良い質疑応答をするにはどうしたらよいかを考え、実行できるようになることを第二の目標とした。

第三の目標は話し方や言葉遣いに関するものであるが、予備教育の段階では見知った教員や同学年の学生の前で話す機会が多いが、フォーマルな場面にはあまり慣れていない学生が多いため、フォーマルな場にふさわしい態度と言葉づかいで発表できるようになることを目標として掲げた。

第四の目標については、学生は修了プレゼンテーションに向けて、自分が何に興味をもっているのかを考えてもらいたいことを明確に示した。高校卒業段階では、将来何を研究したいかはまだ漠然としていて当然であるが、大学入学前にそれを考えておくことは、その後の大学生活を有意義に過ごすための助けになると考え、目標として提示した。

4.1.2 コース前半について

以上の目標達成に向けて、コースの前半では、まず、よい発表とはどのような発表かを考えてもらった上で、表3の授業内容の中で<>で示したテーマについて「発表と質疑応答」を全員に行ってもらった。このテーマとは、毎授業行う発表の課題であり、身近なものから徐々に専門的な内容となるように、そして、最終目標である「専門に関して興味のあることは何か」について、段階を追って考えられるように設定した。各回の授業の流れは以下の通りである。

- (1) その日のテーマについてペアで話す。
- (2) 学生全員の前で発表し、質疑応答をする。質問は必ず全員が行う。その後教師が発表や質疑応答に対してコメントをする。
- (3) その日の発表と質疑応答を自ら振り返って、「良かったところ」と「次回の発表で気を付けるところ(改善すべき点)」をシートにまとめる。
- (4) (3)のシートを見ながら、教師と1対1で後述する評価項目について共に振り返りを行う。

良い発表については、初めにどのような発表が良い発表なのかを学生同士によるディスカッションを通して考えてもらった上で、発表者自身が発表内容をしっかりと咀嚼してまとめ直すこと、聞き手にとってわかりやすい発表の構成を考えること、客観的事実の説明と自分の主張・意見を明確に区別することの重要性等について全員で共有した。また、6回目には、それまでの質疑応答を振り返ってもらいながら、より良い質疑応答をするにはどうしたらよいかを学生自身に考えてもらった。ここでは、発表者と質問者が互いを批判したり攻撃したりするのではなく尊重しあうことが重要であることを確認した上で、それが伝わる言葉遣いをする、質問や応答は短く簡潔にまとめること、発表者は質問の意図が理解できていなければ、それをきちんと確認した上で答えること等を話し合った。

評価については、以下の5点を評価項目として掲げ、毎回の授業の最後に学生と1対1で一緒にその日の発表を振り返りながら評価を行った。

- (1) 発表準備は十分だったか (テーマについてよく考えたか、十分に調べたか、レジюмеは適切だったか)。
- (2) 専門が違う人も理解できる発表だったか。
- (3) 声 (大きさ、スピード)、日本語 (表現、発音、スピーチスタイル) は適切だったか。
- (4) 発表態度 (視線、身振り、質疑応答の時の対応) は適切だったか。
- (5) 授業に積極的に取り組んだか (ペア練習、Q&A)

前半での学生達の取り組みは、情報の羅列になってしまう発表もあったが、質疑応答を通して学生自身がそれに気付いていたようだった。また、テーマが専門的になるに従い、レベルの高い学生はモチベーションが高まっていったようで、難しい専門用語をわかりやすい言葉に言い換えて発表し、他の学生にとってお手本となる発表ができていた。一方で、テーマが難しくなるにつれて発表内容が考えられず、モチベーションが低下する学生もみられたが、今回は「日本事情」クラスでの母語支援もあったため、学生の様子について教師同士で情報を共有しながら、連携した指導を行う事ができた。また、回が進むにつれてフォーマルな場での発表という意識が薄れていったためか、相手を攻撃するような話し方で質問をしたり、うまく答えられずに強い口調で言い返す場面もあったが、質疑応答について話し合ったことを振り返らせながら、どうすべきだったかを学生達自身に考えてもらった。最後のテーマについては、自分の興味の対象が曖昧だった学生がいたが、その中でも何に興味があるのか、それに関連する研究にはどういったものがあるのかを考えるヒントを質疑応答やコメントから得ていたようだった。また今回は、「作文」クラスで発表原稿とレジюмеの作成を行っているため、「発表・プレゼン」クラスでは11期生、12期生での授業と比べて日本語の修正等に時間をかけずに済み、発表の内容や発表方法、質疑応答に重点を置いて授業を進めることができた。

表3 「会話・プレゼン」クラスの授業概要（前半）

	授業内容	各テーマの課題
1回目	オリエンテーション 自己紹介	—
2回目	よい発表とは	—
3回目	発表と質疑応答(1) <おすすめの1冊>	<p>あなたがこれまでに読んだ、自分の専門に関わる本で、印象に残っている1冊はなんですか。以下のことについて説明できるように、準備しなさい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> あなたの専門は何か <input type="checkbox"/> 自分の専門に関わる本で印象に残っている1冊は <ul style="list-style-type: none"> ・誰が、いつ書いた本か ・どのような内容か ・何がおもしろかったか、どうして印象に残っているのか
4回目	発表と質疑応答(2) <学類紹介>	<p>あなたがこれから入学する学類について説明できるように準備しなさい。わからないことがあれば、TAや先輩に聞きなさい。学類が一緒の人と、発表内容が同じにならないよう、相談しながら行いなさい。</p> <p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> どのような専攻があるのか。 <input type="checkbox"/> どのようなことを学ぶことができるのか <input type="checkbox"/> どのような教員がいるのか／どういった研究室があるのか <input type="checkbox"/> それぞれの研究室では、どういった研究がされているのか <input type="checkbox"/> 卒業生はどんなことをしているのか
5回目	発表と質疑応答(3) <今年のノーベル賞>	<p>今年のノーベル賞受賞者の中から一人選び、その人について説明できるように準備しなさい。できるだけ自分の専門と近い人を選びなさい。</p> <p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 受賞者について（名前、国籍、年齢、所属する大学、何賞を受賞したかetc.） <input type="checkbox"/> 受賞した研究内容 <input type="checkbox"/> 受賞した理由 <input type="checkbox"/> 受賞した研究者のエピソード、人柄 <input type="checkbox"/> あなたの意見、感想（必須）
6回目	・より良い質疑応答をするには ・発表と質疑応答(4) <尊敬する研究者>	<p>あなたが尊敬する研究者を一人選び、その人について説明できるように準備しなさい。必ずあなたと同じ専門の研究者を選びなさい。</p> <p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> その研究者について（名前、国籍、年齢、所属する大学、専門etc.） <input type="checkbox"/> 何を研究しているのか（何を研究したのか） <input type="checkbox"/> 尊敬する理由
7回目	発表と質疑応答(5) <興味のあること>	<p>自分の専門に関することで興味のあること（学類に入ってから勉強したいこと、将来研究したいこと）について発表できるように、準備しなさい。どのように話せば聞き手が理解できるか、よく考えて準備しなさい。難しい場合は、先輩やチューターに相談しなさい。</p>

4. 1. 3 コース後半について

コースの後半では修了プレゼンテーションに向けて、表4の流れで授業を行った。

表4 「会話・プレゼン」クラスの授業概要(後半)

	授業内容
8回目	発表会準備(「プレゼンの構成」の再検討と発表会運営準備)
9～11回目	発表練習と検討会(1)・(2)・(3)
12～13回目	発表練習と質疑応答練習(1)・(2)
14回目	通し練習
15回目	予備教育修了プレゼンテーション

発表会当日の運営はすべて学生達自身に行ってもらっているため、後半の最初にどのような役割や準備が必要かを学生たち同士で話し合わせた。そして、それぞれがどういった発表をするのか、プレゼンの構成を考えてもらい、その検討を行った。9回目から11回目までは第1回目の発表練習として、発表原稿、スライド、レジュメをすべて用意してのプレゼンを一人ずつ行ってもらい、全員でその検討を行った。12回目と13回目は、検討会を踏まえて改善したものを再度発表してもらい、質疑応答練習を中心に行った。最後に司会も含めて通し練習を行い、本番に備えた。

4. 2 「作文」

作文の授業では、日本の大学での勉学に必要な作文やレポートなどの論理的な文章が書けるようにするための基礎作りをねらいにしている。前年度までは作文の授業では作文の書き方、メールの書き方等を中心に行っていた。

しかし、前述のとおり、より興味のある作文テーマで作文を書く事で負担を解消して、学生が積極的に取り組めるように、本年度は「会話・プレゼン」クラスと連携して授業を行った。

4. 2. 1 「作文」クラスの授業概要

「作文」クラスの授業目標は以下の通りである。

- (1) これから大学で学ぶ分野、自分の専門について調べたこと、自分の考えを適切な表現を用いて作文を書くことができるようになる。
- (2) 作文を書く練習や書いた作文の添削を通して、読み手にわかりやすい作文が書けるようになる。

- (3) 作文やレポートを論理的に書くための語彙、表現を知り、発表原稿やレジュメが書けるようになる。

授業は、まず作文の書き方の講義を行う。それから、教師が添削した前回の作文のフィードバックと書き直しを行う。そして、作文のテーマについて話し合いをした後、作文を書く。時間内に終わらない場合は宿題になる。最後に次回の作文のテーマの説明をするという流れで行った。2013年度に行った15回の授業シラバスは表5の通りである。作文のテーマは「会話・プレゼン」クラスと共通で、学生は授業で書いた作文を提出し、教師が添削したものを書き直してから、「会話・プレゼン」の授業で発表した。

表5 「作文」クラスの授業概要

	授業内容	作文のテーマ
1回目	原稿用紙の使い方 次回の作文のテーマ「おすすめの1冊」説明	自己紹介
2回目	レジュメの書き方 次回の「学類紹介」説明	おすすめの1冊
3回目	簡条書き、引用の表現 次回の「今年のノーベル賞」説明	学類紹介
4回目	書き言葉と話し言葉 次回の「尊敬する研究者」説明	今年のノーベル賞
5回目	レポート作成の基本「比較」の表現 次回の「興味のあること」説明	尊敬する研究者
6回目	プレゼンの構成	興味のあること
7回目	プレゼン準備1、メールの書き方1	先生にレポートの提出期限を延ばしてもらうメール
8回目	プレゼン準備2、メールの書き方2 プレゼンの構成をもとにレジュメ作成	発表会の招待メール
9～13回目	プレゼン準備3～7 プレゼンの原稿の修正、加筆	
14回目	プレゼン通し練習	—
15回目	期末テスト	—

4.2.2 「作文」クラスの授業内容について

(1) 作文の書き方

コースの前半では課題作文を書くことと並行して、簡条書き、引用、書き言葉、レポート作成・比較等、書くことの基礎を学習した。7名の学生の書く能力は中級前期、中級中期、上級と能力差が大きく、それぞれのレベルに応じた指導が必要であった。特に中級前期の学生4名にとっては日本語で書くことの基礎があまり身につけていなかったため個別の指導が必要であった。

(2) メール

本プログラムの学生は友達にはよくメールを送っているが、先生や目上の人へのメールを書くことには慣れていない。そこで、授業では「先生に本の貸し出しをお願いする安易なメール」を読んでどのような点を直したらよいか話し合ってから自分なりにメールを書き直してもらった。また、「先生にレポートの提出の期限を延ばしてもらおうメール」を書いて、実際に学生が送ってきたものを添削した。学生が書き直したメール、宿題で送信してきたメールは、宛名、件名、日本語の表現・表記、敬語の使い方等に間違いがあったため、訂正したメールを再度提出させた。

修了プレゼンテーションの前には、各自指導教官に「発表会の招待メール」を作成し、教師がチェックした後送信させた。

(3) 修了プレゼンテーションの原稿作成

6回目の授業から修了プレゼンテーションに向けた授業を開始した。まず、プレゼンの構成（発表のタイトル、序論：何について発表するのか、本論：客観的説明、自分の考え方や主張等、結論：まとめ）を記入して発表の全体像をまとめたものを提出させた。それから、発表原稿執筆に取り掛かり始めた。プレゼンの準備1～7では教師が学生の原稿を添削し、学生が修正、加筆を繰り返していった。学生それぞれの分野や発表内容が違うため、授業中は個別に面談し、話し合いながら授業を進めた。また、「会話・プレゼン」の授業と連携していたため、授業で発表した後、訂正が必要な点が指摘されていたので、それをもとに原稿の修正を進めた。

4. 3 「日本事情」

4. 3. 1 本プログラムにおける役割と、本連携における役割

日本国内でのノンネイティブ日本語教師は増加しており、その役割や必要性も注目されつつある。ノンネイティブ日本語教師は、「学習者としての経験を活かし、学習が難しいと感じるところを説明できる、日本語を客観的に見ることができ、困難点に対する気づきがある（加納2010）」という日本語学習を支援する上でのメリットもあれば、①日本語や日本文化を母語・母文化と比較して教えられる（横田2013）、②学習者と母語や文化背景が同じで話しやすい存在になれる、③学習以外の生活についてのアドバイスやストラテジーが与えられる（金他2002）、④マイノリティとしての心理的な支援ができる（古市2005）、⑤学習者のモデルになれる（カイザー1995）という日本語学習支援以外のメリットもある。そして、学習者には日本の文化・社会に関しては母語での指導を求める傾向がある（KONGJIT・吉田2012）。それゆえ、筑波大学留学生センターでは、日韓プログラムの「日本事情」クラスを韓国語母語話者の教員が担当している³。

本プログラムにおいて「日本事情」クラスの教員が担っている役割は、①今後の大学生

活に必要な日本事情・日本文化を、母語・母文化と比較して教える、②話しやすい存在として、学習以外についてもアドバイスやストラテジーを与えながら心理的支援を行う、③学習者にロールモデルになれるような理工系留学生の成功例を提供する、ことである。①に関しては、本予備教育を修了した学群生に「予備教育で学んでおいて／おけばよかった日本事情・日本文化」というアンケート調査を行った結果を、授業の初日に学生に配り、希望を聞いて授業内容を決めている。②に関しては、普段から学生と授業内外で母語による積極的なコミュニケーションを行い、異文化圏での生活からくる悩みや困難点、および年頃の心理変化に細かく注意を払っている。③に関しては、日本国内の理工系研究所を見学し、該当機関に勤めている韓国人研究者から経験談と助言を得る機会を提供している。以上の「日本事情」クラスの担当教員として役割に加え、2011年度からは「韓国語母語話者」として「会話・プレゼン」クラスの担当教員と協働し、日本語レベルの低い学生や興味のある専門内容が決まっていない学生に対する個人対応をクラス外で行っていた。

今期から修了プレゼンテーションの母語支援を「日本事情」クラスに取り入れることになって直面した問題は、本クラスの第一の役割である「今後の大学生活に必要な日本事情・日本文化を教える」ことに「修了プレゼンテーションへの母語支援」をどのように関連づけるかということである。今期はその第一歩として、表6の計画で授業を進めた。

表6 「日本事情」クラスの授業概要

		授業内容	
		日本事情	プレゼン支援
前半	1回目	希望調査と発表分担	自己紹介
	2回目	読み物と議論 (1)	日本語によるウェブ検索 (日本事情の発表テーマでの練習)
	3回目	読み物と議論 (2)	日本語によるスライド作成 (日本事情の発表テーマでの練習)
	4～7回目	担当テーマの個人発表	発表態度と質疑応答の練習 (母国・高校での発表との違い)
後半	8回目	異文化体験ゲームとフィードバック クイズ日本事情	「会話・プレゼン」・「作文」授業の振り返りと下位の学生への母語支援 (1)
	9回目	理工系研究所の見学	—
	10回目	研究所見学の振り返り クイズ日本事情	「会話・プレゼン」・「作文」授業の振り返りと下位の学生への母語支援 (2)
	11回目	茶道体験	—
	12回目	茶道体験の振り返り クイズ日本事情	「会話・プレゼン」・「作文」授業の振り返りと下位の学生への母語支援 (3)
	13回目	—	プレゼン通し練習
	14回目	予備教育のまとめ、4月に向けて	

4.3.2 コース前半について

「会話・プレゼン」クラスと「作文」クラスで修了プレゼンテーションの本格的な準備を始める前に、本クラスで個人発表（日本事情・文化についての担当テーマ）を通し、日本語のウェブ検索や日本語のスライド作成、日本語での発表態度と質疑応答の練習を行った。

7人とも学期初めからパソコン操作能力は優れていたが、大学で学んだ経験がないため、アカデミックな場に相応しいスライドの作成や言葉遣いは母語でさえ身につけていなかった。写真や図表で枚数だけ増やしたスライドや細かい字を詰め込んだスライドは言うまでもなく、母国の高校の評価基準から抜け出せず、発表を「自分がどれほど広くかつ深く調べたのかを知らせる行動」として理解していた。また、日本語のウェブ検索への不慣れと経験不足によって韓国語のウェブ検索の結果を直訳したスライドと、ハングル入りの図表を張り付けたスライドも多かった。中には、韓国語のソフトで日本語のスライドを作り、日本語としては非常に違和感のある字体のスライドや文字化けになったスライドも見られた。このような問題は、2～3回目の授業でシミュレーションを行い、4～7回目の授業で個人発表を重ねるうちに徐々に改善され、修了プレゼンテーション準備が本格的に始まるコース後半になると、殆ど見られなくなった。また、個人発表を通して、発表態度と質疑応答の練習も行った。特に質疑応答においては、質問する側も答える側も互いに攻撃されたと思い、もめ合う場面も時折あった。このような場面が見られると、クラス全体で母語に切り替え、もう一度同様の質疑応答をさせた後、母国の高校での言い方と日本の大学での言い方の違いについて一緒に考える時間を設けた。このような回が重なるにつれ、学生も言いたいことを言うだけでなく、誤解されないように言葉や表現にも気を付ける様子が徐々に増えてきた。

4.3.3 コース後半について

コースの後半では、修了プレゼンテーションの本格的な準備が始まり、学生が緊張し始めたため、本クラスでは異文化体験ゲーム、日本事情についてのクイズ、研究所見学、日本文化（茶道）体験など、できるだけその緊張がほぐれるような活動を取り入れた。プレゼンに関する活動としては、「会話・プレゼン」・「作文」クラスの授業を振り返る時間を設けた。プレゼン授業で発表や質疑応答がうまくできなかった内容、作文の宿題でうまく表現できなかった箇所について話し合った。質疑応答に関しては、前半での経験を活かし学生同士で話し合い、問題点と改善策を探るようにした。母語で再生しながら互いにコメントし合ううちに、日本語で行っているときには気が付かなかった内容や表現および態度の問題点に気づき、学生同士で改善案を打ち出す様子が多く見受けられた。作文の宿題に関しては、作文クラスの教員に添削された箇所や修正を求められた箇所について理由や修正方向を話し合った。自分の言いたいことがうまく伝わらなかった悔しさが、添削・修正が

必要な理由がわからないといった態度として現れることも時折あった。その際には、言いたいことを母語でまとめてもらい、どうして伝わらなかったのか、どのように表現したら伝わるかをクラス全体で考えた。それでも、下位の学生の中には、興味のある内容や紹介したい内容を絞ることができず、また自分自身でも発表内容が理解できず、終盤まで内容や構成の修正を繰り返した学生がいた。その学生にはクラス内外での個人対応を母語で行った。

5. 予備教育修了プレゼンテーションにおける学生たちの取り組み

学生たちが行ったプレゼンテーションのテーマは以下の通りである。

- ・学生A (生物学類) : 脳と記憶
- ・学生B (応用理工学類) : トリウム原発
- ・学生C (応用理工学類) : 高温超伝導体
- ・学生D (応用理工学類) : 組織工学—iPS細胞技術とのつながり—
- ・学生E (工学システム学類) : 人工知能自然言語処理
- ・学生F (物理学類) : クォークグルーオンプラズマ
- ・学生G (工学システム学類) : 医療ロボット

今回の連携の第一の成果は、下位の学生の発表が例年に比べ、日本語にしても内容にしても質的に向上したことである。特に、日本語力の最も弱かった学生が、発表会に向けて報告者の3名も驚くほどのラストスパートをかけて追い上げをみせたため、発表そのものは他の学生と肩を並べるほどよくできた。本人もその経験から今後への自信を得たようで、教師、学生ともに遣り甲斐を感じた。毎年、他の学生と比べて明らかに劣った発表をしてしまう学生が1名はいたが、今期は7名全員とも日本語力や専門知識における著しいレベル差は感じられず、全体的にバランスがよく取れていた。全員、興味を持った理由、興味のある分野、今後の抱負をしっかりとまとめて分かりやすく発表が行っていた。また、それぞれがやり遂げたという達成感を得たようで、クラス間連携による効果が確認できた。

また、今回は「発表・プレゼン」クラスの担当教員が、例年に比べて発表内容と質疑応答により重点をおいて指導することができたため、上位の学生は準備過程において発表の内容を深めたり、質疑応答に備えた知識を増やしたりする余裕が見られた。それが本番の質疑応答の際にも現れており、例年に比べて質問者から一方的に批判的なコメントをされる場面が少なくなり、しっかり受け答えができる場面が増えていた。これは、3クラスすべてで、発表原稿や発表の仕方のチェックと修正を何度も行ったことにより、聞き手にとってわかりやすい発表をすることができたためでもあるだろう。ただ、質疑応答においては、

やはり日本語力の差が表れていた。下位の学生は、最後まで発表内容の修正や口頭練習に追われ、質疑応答の練習や準備にあまり時間がかけられなかったため、質問が聞き取れても答えられない場面が多々あった。一方、上位の学生は自分なりの強みが発揮できる場面となったようで、それがより達成感につながった様子であった。

6. 本試みの振り返りと今後の課題

6.1 「発表」クラスの教員からみた、成果と課題

- ①コース前半では、「作文」クラスの課題と同一のテーマで発表を行ってもらったことにより、聞き手にとって分かりやすい発表構成の組み立て方や、アカデミックな日本語での発表方法、質疑応答の方法について重点的に指導を行う事が出来た。また、後半では修了プレゼンテーションに向けて3名の教師が段階を踏んで繰り返し指導を行えたことにより、学生自身が内省を行い、興味関心を掘り下げ、発表上の問題点の改善を行うことが出来ていた。これにより、日本語レベルの低かった学生や、自分の興味関心がどこにあるのかをなかなか見つけられなかった学生も、最終的に質の高い発表が行えていた。
- ②修了プレゼンテーションの準備において、3クラスで連携したものの、中には発表テーマの決定や内容の修正に時間がかかった学生もおり、学生達同士による発表内容の検討や質疑応答練習が十分に行えないものもあった。そのため、個々の学生が、自らの能力を向上させることはできていたものの、学生達自身でお互いの発表を向上させるまでには至らず、それが結果として、質疑応答での差に表れたと考えられる。今後は、コースの前半から、学生の専門分野における興味関心により焦点を当てた「発表と質疑応答」練習を実施することで、学生同士による最終発表テーマの検討を早い段階から促したい。その上で、テーマ決定に時間のかかる学生に対しては、3クラスの教員でその情報を共有し、各クラスでどのような支援が可能かを検討し、連携した指導を行うことが必要だろう。

6.2 「作文」クラスの教員からみた、成果と課題

- ①従来までの「作文」だけの授業では学生は作文の課題にあまり興味が持てず、積極的に作文に取り組めない面がみられた。連携することによって、「学類紹介」、「ノーベル賞」、「私の尊敬する科学者」のように、学生たちの専門により関係のある課題を取り上げることができ、作文を書くことのモチベーションがあがったようである。今後も作文とプレゼンの連携を通した授業を行い、書くことと発表力の総合的な伸びを図っていきたい。また、学生の課題の内容に特化した教材を選択したい。
- ②6回目から最終発表の準備として、作成手順を踏んで原稿の構成、レジュメ作成、原稿の修正、加筆を進めることができた。また、「会話・プレゼン」の授業でも同様に行い、

両クラスで内容のチェックができ、より丁寧に準備を進めることができた。連携によるこの発表準備手順は今後も行いたい。本年度は6回目から準備に入ったが、それでも全体的にテーマや内容を絞ったり、内容の修正にかなり時間がかかった。発表の前には授業以外に準備時間が必要であった。そのことから考えると、さらに早めに最終発表に向けた準備を始める必要があるといえる。

6.3 「日本事情」クラスの教員からみた、成果と課題

- ①前半では「会話・プレゼン」・「作文」授業の先取りを、後半では「会話・プレゼン」・「作文」授業の振り返りを行うことで、日本語と母語の両方で類似経験ができ、学生が自力で問題点と改善策を考え直す練習ができたことは、今後の自律学習のための有益な経験になったと考えられる。また、本番で達成感を得られなかった学生が一人も出なかったことも、今後の学習への自信を持たせた点で評価できることであろう。
- ②最後まで発表内容と構成の修正を繰り返していた学生のことを考えると、興味のある内容を決め、絞り、発表構成を考えるための母語支援を、本クラスでコースの前半から行ったほうがよかったという反省も残る。ただ、「日本事情」というクラスの特徴上、修了プレゼンテーションに向けた連携をどのように日本文化と事情に関連付けてどの程度まで本クラス内に取り入れるかについては、今後更に検討・改善が必要であろう。

7. おわりに

高校卒業段階の学生にとって、大学入学前の時点で専門分野に関する発表をアカデミックな日本語で発表し、質疑応答を行うことはハードルの高い課題と言える。しかし、大学入学後に日本人学生と肩を並べて学業に励むためには、母語話者でない彼らは一層の努力が必要となり、修了プレゼンテーションでの成功体験は、そのモチベーション維持の一助になりうると考える。今期の修了プレゼンテーションに参加した学群教員から、「日本人学生ではできないこと」との感想が聞かれたが、すでに自分の関心分野についての知識を深め、アカデミックなプレゼンテーションができるようになってきていることは、日韓共同理工系学部留学生のアドバンテージとして、今後の学群生活での支えとなるのではないだろうか。また、どの学生も口を揃えて「母国ではプレゼンテーションを行ったことがなかったから面白かった」との感想を述べており、レベルの高低に関わらず、それぞれ充実感や達成感を感じていたことを踏まえても、今後も引き続き日韓予備教育において修了プレゼンテーションを実施していくことの意義を実感することとなった。そして、今回は3クラスが連携することで、今期の課題であった基礎的な文章力の低さや、日本語レベルの差を解決しながら、どの学生のプレゼン能力もアカデミックな場にふさわしい段階まで向上させられる可能性があることが分かった。今回の取り組みを次期以降も生かし、それぞれの

クラスの目標に沿ったより良い連携方法への改善と、学生の質疑応答能力のさらなる向上を目指すことが求められるだろう。

注

1. 報告者が「会話・プレゼン」クラスを担当するようになったのは2011年度からであるため、それ以前についてはこの限りではない。
2. 筑波大学留学生センターの授業は1コマ75分で行われる。
3. 報告者が「日本事情」クラスを担当するようになったのは2010年度からであるため、それ以前についてはこの限りではない。

参考文献

- 金孝卿・于之玲・許明子 (2002) 「日本語学習者に大接近！ ノンネイティブ教師座談会 学ぶ立場から教える立場へ」『月刊日本語』 2月、アルク：20-2
- カイザーシュテファン (1995) 「ノンネイティブ日本語教師の役割：異文化間教育現場としての日本語教育を目指して」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 10：95-106
- 加納千恵子 (2010) 「大学院における日本語教師養成の課題：ネイティブ・ノンネイティブによる教師役割観の違い」『国際日本研究』 2：99-116
- 木戸光子・石上綾子・加藤あさぎ・田中孝始・長門三成子・中山健一・和氣圭子 (2012) 「日本語スタンダードに基づく中上級日本語作文コースの構築にむけて」『筑波大学留学生センター 日本語教育論集』 27：207-227
- 野田尚史・森口稔 (2003) 『日本語を書くトレーニング』 ひつじ書房
- 古市由美子 (2005) 「多言語多文化共生日本語教育実習を通してみた非母語話者教師の役割」『小出記念日本語教育研究会論文集』 13：23-38
- 許明子・西村よしみ・小林典子・酒井たか子 (2004) 「筑波大学日韓共同理工系学部留学生事業報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 19号：73-87
- 横田隆志 (2013) 「留学生の日本におけるノンネイティブ日本語教師に対する意識調査」『CAJLE Annual Conference Proceedings』：322-331
- KONGJIT, S.・吉田直子 (2012) 「ティーム・ティーチングにおけるノンネイティブ教師の役割分担 - チェンマイ大学初級日本語クラスのタイ人学習者の期待 - 」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』 9：129-137

資料 1

3 クラスの授業連携の流れ（後半）

月日	曜日	作文	日本事情	会話・プレゼン
11月21日	木	⑦プレゼン準備(1)、メールの書き方(1) ・「プレゼンの構成」の返却 ・プレゼン原稿の作成		
11月22日	金		⑧異文化体験ゲームとフィードバック、クイズ 日本事情／「会話・プレゼン」・「作文」授業の 振り返りと下位の学生への母語支援(1)	
11月25日	月			⑨発表会準備 ・「プレゼンの構成」の再検討 ・発表会運営準備
11月28日	木	⑧プレゼン準備(2)、メールの書き方(2) ・「プレゼンの構成」を用いたレジュメ作成		
12月2日	月			⑩発表練習と検討会(1)
12月5日	木	⑨プレゼン準備(3) ・原稿(レジュメも含む)の修正と加筆 ・PPTの作成と修正		
12月6日	金		⑨理工系研究所の見学	
12月9日	月			⑩発表練習と検討会(2)
12月12日	木	⑩プレゼン準備(4) ・原稿(レジュメも含む)の修正と加筆 ・PPTの作成と修正		
12月13日	金		⑩研究所見学の振り返り、クイズ日本事情／ 「会話・プレゼン」・「作文」授業の振り返りと下 位の学生への母語支援(2)	
12月16日	月			⑪発表練習と検討会(3)
12月19日	木	⑪プレゼン準備(5) ・原稿(レジュメも含む)の修正と加筆 ・PPTの作成と修正		
12月25日	水			⑪発表練習と質疑応答練習(1)
12月26日	木	⑫プレゼン準備(6) ・原稿(レジュメも含む)の修正と加筆 ・PPTの作成と修正		
1月6日	月			⑬発表練習と質疑応答練習(2)
1月9日	木	⑬プレゼン準備(7) ・原稿(レジュメも含む)の修正と加筆 ・PPTの作成と修正		
1月10日	金		⑪茶道体験	
1月16日	木		⑫茶道体験の振り返り、クイズ日本事情／ 「会話・プレゼン」・「作文」授業の振り返りと下 位の学生への母語支援(3)	
1月21日	火			⑭通し練習
1月23日	木	⑭通し練習		
1月24日	金		⑭通し練習	
1月27日	月	予備教育修了プレゼンテーション		
1月30日	木	⑮振り返り		
1月31日	金		⑭予備教育のまとめ、4月に向けて	

資料 2

3 クラスの授業連携の流れ (前半)

月日	曜日	作文	日本事情	会話・プレゼン
10月3日	木	①作文「自己紹介」 ・原稿用紙の使い方、作文の書き方 ・「おすすめの一冊」説明		
10月4日	金		①希望調査と発表分担／自己紹介	
10月7日	月			①自己紹介
10月10日	木	②レジュメについて ・「おすすめの一冊」初稿提出・受け取り・修正・レジュメ ・「学類紹介」説明		
10月11日	金		②読み物と議論(1)／日本語による ウェブ検索	
10月17日	木			②「よい発表とは」
10月18日	金		③読み物と議論(2)／日本語による パワーポイント作成	
10月21日	月			③発表と質疑応答(1) 「おすすめの一冊」 ・「学類紹介」初稿提出
10月24日	木	③「学類紹介」修正稿作成・提出・レジュメ作成 ・「今年のノーベル賞」説明		
10月25日	金		④担当テーマの個人発表(1)／発表 態度と質疑応答の練習	
10月28日	月			④発表と質疑応答(2) 「学類紹介」 ・「今年のノーベル賞」初稿提出
10月31日	木	④「今年のノーベル賞」修正稿作成・提出・レジュメ作成 ・「尊敬する研究者」説明		
11月1日	金		⑤担当テーマの個人発表(2)／発表 態度と質疑応答の練習	
11月6日	水			⑤発表と質疑応答(3) 「今年のノーベル賞」 ・「尊敬する研究者」初稿提出
11月7日	木	⑤「尊敬する研究者」修正稿作成・提出・レジュメ作成 ・「興味のあること」説明		
11月8日	金		⑥担当テーマの個人発表(3)／発表 態度と質疑応答の練習	
11月11日	月			⑥発表と質疑応答(4) 「尊敬する研究者」 ・「興味のあること」初稿提出
11月14日	木	⑥「興味のあること」修正稿作成・提出・レジュメ作成		
11月15日	金		⑦担当テーマの個人発表(4)／発表 態度と質疑応答の練習	
11月18日	月			⑦発表と質疑応答(5) 「興味のあること」 ・「プレゼンの構成」の検討